

(論文)

## 国際柔道連盟による戦略的改革

野瀬英豪 野瀬清喜  
三戸範之 小室宏二

### キーワード

国際柔道連盟 (IJF) 改革 ワールドランキング オリンピック出場資格  
国際試合審判規定

### はじめに

現在、国際柔道連盟 (IJFと略す) への加盟数は国連加盟数192を超える199を数え、オリンピックや世界選手権以外でも数多くの国際大会が世界各国で開催されている。<sup>1)</sup> このように、日本で生まれた「柔道」は「JUDO」という世界共通語としての位置づけを得て、国際的な武道として世界中の人々に愛好されるようになった。2011年、IJFは発足60年を迎え、競技とともに大きな発展を遂げている。IJF独自の発展を背景に、柔道発祥の地として日本の発言力は低下してきている。

IJFが競技システムの導入や試合審判規定の改訂を提案することに対して、日本はその度、反対するが、次々と採用されてきた。「赤畳」の撤廃、「カラー柔道衣」、「ゴールデンスコア方式」の導入などがそれらにあたる。

そして、2007年リオデジャネイロで行われたIJF総会では山下氏が教育・コーチング理事の選挙でアルジェリアのメリジャ氏に61対123の大差で敗れ、IJF理事会に日本からの代表者がいなくなるという事態が起こった。<sup>2)</sup> 翌日、指名理事として上村春樹氏の就任が決定されたものの、今後はさらに日本の発言力を失う可能性もある。

そうしたなか、2008年10月タイのバンコクで行われたIJF総会において「ワールドランキングシステムの導入」、「オリンピック出場資格システムの導入」、「国際試合審判規定の改訂」など大きな改革を提案した。

これらを指揮したのは、2007年IJF会長に就任したマリアス・ビゼール氏である。彼は柔道選手として目立った実績はないが、事業で築いた財力と人脈を武器に、まずは欧州連盟の会長に就任したのである。毎週のように欧州各地で大会を開催し、メディアやスポンサーとも連動して商業化を図り、柔道人気を拡大させてきた。

ビゼール氏は会長就任時、2007年IJF総会で6つの構想を基に改革を行うことを報告している。①柔道人口の増加、②柔道の教育システムの強化、③スポーツにおける柔道の地位向上、④財源の増加、⑤柔道のイメージの向上、⑥柔道の組織の近代化。<sup>3)</sup>

以上の観点を踏まえ、ビゼール氏の会長就任後のIJFが変更した競技システムや試合審判規定を把

のせ えいごう：淑徳大学 女子柔道部 監督  
さんのへ のりゆき：秋田大学 教育文化学部 准教授

のせ せいき：埼玉大学 教育学部 教授  
こむろ こうじ：東京都市大付属中学校・高等学校 教員

握し、その改革の意図について考究していきたい。本研究は今後、柔道が武道としての良さを失わずに競技とし発展する方法を示す一助となる研究である。

## 1. ワールドランキングシステム・新オリンピック出場資格システムの導入

### 1. ワールドランキングシステム

ビゼール会長就任後、IJFにおける代表的な戦略としてワールドランキングシステム（以下、ランキングシステムと略す）が挙げられる。ランキングシステムとは、オリンピック、世界選手権、その他の国際大会の格付けを明確にし、その“格”に応じて入賞ポイントを定め、選手が獲得したポイントによって階級ごとのランキングが出来上がるというシステムである。

このシステムは階級別に選手の格を示すことで、柔道を観戦する側に選手同士の力関係や注目度などをより分かりやすくするために導入されたものである。オリンピック、世界選手権を頂点とし、新設されたマスターズ、これまでのフランス国際、ロシア国際、嘉納杯東京国際、ブラジル国際など4大会がグランドスラムと名称を変え、その下にグランプリが5大会、ワールドカップ17大会と、新設の大会が格付けされた。

各国際大会は、その格に応じたポイントが与えられ、優勝者のポイントはオリンピックの600点を最高に、世界選手権500点、マスターズ400点、グランドスラム300点、グランプリ200点、ワールドカップ100点と続く。優勝者以外にもポイントが与えられるが準優勝者は優勝者ポイントの60%、3位は同40%と段階的に下がり、1勝以上の選手全てにポイントが与えられる（世界選手権のみは出場でポイントが付与）。

各選手は1年間で最大5試合までのポイントを合計し、世界ランクが決まる。大会から1年たつとそのポイントは50%となり、2年後には0（ゼロ）%となる。そして、ランキングの順位は、各国際大会のシード選手を選ぶ場合にも使用される。

IJFはワールドツアーと呼ばれる各国際大会を主催し、2009年は25都市で20試合、2010年は34都市で26試合を行われており（2011年では34都市27試合で開催）、年間の試合数が年々増えてきている傾向にある。ワールドツアーと呼ばれる試合とそれぞれの大会で獲得できるポイントの配分は以下の通りである。<sup>4)</sup>

#### ● グランドスラム

- ・ ツアー最大の試合。年間4試合、フランス（パリ）、ロシア（モスクワ）、ブラジル（リオデジャネイロ）、日本（東京）にて開催される。
- ・ 各国2名の選手が出場でき、開催国は4名の選手が出場できるが、ランクへのポイント加算は上位2名である。
- ・ 2年以内に、世界選手権、各大陸選手権（ジュニア大会含む）またはワールドカップに出場していなければ、グランドスラムには出場できない。

#### ● グランプリ

- 2
- ・ 年間5試合、ドイツ（ハンブルク）、チュニジア（チュニス）、アメリカ（開催都市未定）、中国（北京）、アラブ首長国連邦（アブダビ）にて開催される。
  - ・ 出場条件などはグランドスラムと同様である。

#### ● ワールドカップ

- ・ 年間18試合、グルジア（トビリシ）、オーストリア（ウィーン）、チェコ（プラハ）、アゼルバイジャン（パワー）、モンゴル（ウランバートル）などで開催。（2010年）
- ・ 各国4名まで出場でき、全ての選手にポイントが加算される。

## ● マスターズ

- ・世界ランキング上位15選手+(プラス) 開催国1名のみが出場することができる。

POINT	ワールド カップ	オセアニア 大陸選手権	各大陸選手権	グランプリ	グランド スラム	マスターズ	世界選手権	オリンピック
1 位	100	80	180	200	300	400	500	600
2 位	60	48	108	120	180	240	300	360
3 位	40	32	72	80	120	160	200	240
5 位	20	16	36	40	60	80	100	120
7 位	16	12	28				80	96
ベスト16	12	12	20	24	36		60	72
ベスト32	8	8	12	16	24		40	48
初戦突破	4	4	8	8	12		20	24
参加点							4	

- ・2010年1月、アゼルバイジャンで開催。2012年はカザフスタンで開催の予定。

※各大陸大会はオセアニア大陸のみポイント配分が異なる。

## 2. オリンピック出場資格システム

ランキングシステムの導入に伴い、オリンピック出場資格システムも変更されることとなった。システムの一般的なルールとしては、以前までと異なり出場資格は国ではなく直接、個人の選手に与えられることである。

2012年5月1日時点のIJFランキングリストが全合計385名の選手枠の内352枠（直接的な出場資格枠252枠+大陸の出場資格枠100枠）を割り当てるために使用される。それに開催国枠、三者委員会招待枠を加え合計385名の選手枠が決定されることとなった。それぞれの枠の選出方法を以下にまとめる。<sup>5)</sup>

## ○ 直接的な出場資格枠（252枠）

- ・男子の各階級は上位22名（22カ国、22名）の選手をランキングリストの上位から直接選出する。  
( $22 \times 7 = 154$ 枠)
- ・女子の各階級は上位14名（14カ国、14名）の選手をランキングリストの上位から直接選出する。  
( $14 \times 7 = 98$ 枠)
- ・各階級上位から確認して、22カ国目（女子は14カ国目）までの選手を特定する。1つの国から1名だけがこの順位に入っている場合、その選手が出場資格を獲得する。もし、1つの国から複数の選手が上位22カ国（女子は14カ国）の中に入っている場合、どの選手を選出するかは、その選手が所属する国家連盟が決定する。

## ○ 大陸の出場資格枠（100枠）

- ・直接的な出場資格枠に加えて、それに続くランキング上位選手が対象となる。
- ・大陸に与えられる出場枠の合計は、各大陸ユニオンの加盟国の数に従い、以下の通りである。

大 陸	国	男 子	女 子	合計枠
アフリカ (AJU)	47	14	10	24
ヨーロッパ (EJU)	50	14	11	25
アジア (JUA)	38	12	8	20
オセアニア (OJU)	17	7	3	10
パンナム (PJU)	42	13	8	21
合 計				100

- ・世界ランキングリストを使って各大陸のランキングリストを作成し、すべての階級と性別におい

て高得点の選手を選出する。

- ・大陸のランキングリストに従い、男女ともにすべての大陸枠が埋まるまで、ランキング上位リストの上から順番に出場枠を割り当てる。
- ・すべての階級、性別において、各国から最大1名の選手までが大陸の出場枠を獲得することができる。
- ・大陸枠による出場資格を獲得することができるのは、各ユニオンから各階級2名まで。

○開催国枠

- ・開催国に男女各階級1枠（計14枠）が与えられる。

○三者委員会特別招待国枠

- ・三者委員会特別招待国枠は（＊ワイルドカード）は出場するための条件を満たしている12の国に与えられる。<sup>3)</sup>

### 3. ランキングシステムに関する考察

ランキングシステムの導入は柔道を見る観衆にとって、非常に分かりやすい基準となった。だが一方で、選手やコーチの視点からは以下のようなデメリットを指摘している。

全日本代表男子監督の篠原信一氏は2009年オランダ・ロッテルダム世界選手権の大会総評で、「今大会が今までの世界選手権と異なるのは、毎年開催になった事ともう一つ、本年（2009年）1月からポイントランキング制が導入され、国際ランキングで上位8名しかシードされないことである。代表選手も従来のように世界選手権へ向けた国内強化だけでなく、国際大会で勝ってポイントを獲得し、シード権を獲得しなければならない状況にあった。今大会の結果から明らかなように上位に入賞した選手のほとんどがシード選手であったことから、今後も世界選手権ではランキング上位に位置しなければ戦いが困難になると考えられる。」<sup>6)</sup>と述べている。

以前までは国内で徹底的な強化を行い、世界選手権へ調整していった。それがランキング制の導入により、常に試合へ出場し、ポイントを獲得しなければならないのである。まず、ここで篠原氏の指摘するシード権の重要性についてまとめていきたい。

2009年オランダ・ロッテルダムで行われた世界選手権では、男子メダル獲得選手28名中16名（約57%）、女子28名中18名（約64%）、全体では約60.5%の選手がシード権を持った選手であった。次いで、2010年東京で行われた世界選手権では、男子メダル獲得選手28名中17名（60.7%）、女子では実に28名中21名（75%）という数値が出ている。<sup>7)</sup>

つまり、上記の2大会においてメダルを獲得した選手の68%がシード権を持っていたことが分かる。単にランキング上位に位置する選手は、実力的に優れているとも考えられる点もあるがそれだけとも言えないのであろう。それはIJFの改革によって、敗者復活戦の仕組みが変わったからである。以前の仕組みでは、決勝に勝ち上がった選手に負けた選手に敗者復活戦の権利が与えられていた。2009年1月からはベスト8に残らなければ敗者復活戦の資格が得られなくなったのである。

- 4 これらを踏まえ、世界選手権でメダルを獲得するためにはランキングで上位8名以内に位置し、シード権を獲得していることが重要なポイントといえる。こうした点もIJFが狙った戦略通りなのかもしれない。ランキングによってシード権を与えることで、上位ににいることのその重要性が増してくる。それがより多くの大会へ参加を余儀なくさせるのである。その結果、篠原氏の言うように強化の体制を見直さなければならないのであろう選手はより多くの国際大会に出場し、なお国内での合宿といった強化をこなせるだけの強さが必要である。

このように、ランキングシステムは見る側にとっては多くのメリットがある反面、選手には大き

な負担になっていくであろう。また、各国際大会において上位の選手同士が何度も対戦することによって、試合展開が膠着する可能性もある。ランキング導入以前は、世界選手権やオリンピックという大舞台での無名の選手が勝ち上げてくるという展開も見応えがあったともいえる。今後は上位選手にシード権が与えられ、有利な組み合わせになることでそうした展開は減ってくるのであろう。

#### 4. オリンピック出場資格システムに関する考察

ロンドンオリンピック出場資格はワールドランキングを基準として与えられる。ロンドンオリンピックに出場する為には、2012年5月1日時点のランキングリストで高位置につけていなければならないのである。

各々の国際大会で獲得したポイントは1年後に50%になり、2年後には0となるというルールが定められている。2010年が終わった時点で、ランキングでトップクラスの選手であっても、2012年の5月1日まで大会に頻繁に出場しポイントをコンスタントに獲得し続けなければオリンピックに出場できない。

このシステムは、国際大会に多数の選手を参加させることのできない国にとって、不利な基準といえる。国際大会が毎年、自国開催される国は、選手を出場させることに対して全く問題ないだろう。現に、我が国では選手・監督・コーチ以外にも役員・競技研究部員などスタッフまで帯同するだけの経済的余裕がある。

だが、経済的な面や地理的な面で問題がある国々は、国際大会等に掛かる遠征費などが大きな負担となる。その為、参加できる大会の数は必然的に減少し、チャンスが少なくなる。これは強豪国や大都市を有する国にとって有利なシステムという見方ができる。

近年の世界選手権開催地の歴史を以下にまとめる。<sup>8)</sup>

2010年	東京	人口	1,157万4千	
2009年	ロッテルダム	人口	59万8千	*欧州有数の貿易港
2007年	リオデジャネイロ	人口	554万7千	*旧首都、国際的観光地
2005年	カイロ	人口	680万	*アフリカ初開催 エジプト、アラブ共和国の首都
2003年	大阪	人口	860万7千	
2001年	ミュンヘン	人口	124万4千	*南ドイツの経済・文化の中心

上記の通り、近年の世界選手権は強豪国や大都市で開催されていることが分かる。エジプトを除く日本・オランダ・ブラジル・ドイツは、2005年以降の世界選手権・オリンピックにおいて合計で2桁数メダルを獲得する強豪国である。

その上、グランドスラムはパリ、モスクワ、リオデジャネイロ、東京で毎年、開催されている。それらの大会が開催されない国や地域にとっては、ホームアドバンテージを受けられる大会がなく、全てがフェアという訳ではないのである。

新オリンピック出場資格システムも含め、ランキングの重要性は言うまでもない。それだけに、<sup>5</sup>選手に平等なポイント獲得のチャンスが与えられることが理想である。

## II. 国際試合審判規定の改訂

### 1. 概要

IJFはオリンピック出場資格獲得期間に試合審判規定を変更しないために、2009年パリで行われた世界ジュニア選手権、さらにアブダビグランプリ（UAE、11月20～21日）、青島グランプリ

(中国、11月28～29日)、スウォンワールドカップ(韓国、12月4～5日)、グランドスラム東京(日本、12月11～13日)において新規定の施行を行い、2010年1月1日から2012年12月31日までの国際試合審判規定の改訂が決定された。

国際試合審判規定の改訂点を以下の10項目にまとめる。<sup>9)</sup>

① 手や腕によって帯より下へ直接攻撃または防御は全て禁止

- ・ダイレクトに手や腕で脚を攻撃した場合は1回目で直接「反則負け」

例えば、「小内巻込」(相手の片脚を腕で抱え込み一緒に倒れこむようにして倒す技)、「肩車」(姿勢を低くして片手で相手の片足を抱え担ぎあげるようにして投げる技)、「朽木倒」(手で相手の足を取って倒す技)

- ・ただし、柔道精神に反する行為をしたわけではないので、その後の一連の試合には出場することはできる。

- ・連絡技として脚を取る場合は、反則負けとはならない。

例えば、背負投(相手の体を自分の背に引きのせて投げる技)→肩車、背負投→脚取り、袖釣込腰(相手の袖を釣り込むようにして投げる技)→脚を握ったり抱えたりすること、大内刈→脚取り、小内刈→朽木倒…等があり、若干の時差があること。「小内巻込」や脚を持つての「大内刈」などは、脚と手が同時の場合は「反則負け」となる。重要なのは、1つ目の技が「本気で投げに行こうとしているか」であり、フェイントや形だけの技を見せただけで脚を取ることは「反則負け」になる。

- ・返し技で脚を取ることは反則にはならない。

例えば、内股(相手の内股を脚で跳ね上げて投げる技)を掬投(相手の股を手で掬い上げて投げる技)で返す、背負投を掬投で返す、大外刈(相手を後方に崩し、相手の体重のかかっている足を斜め後方から刈り上げて倒す技)を掬投で返す…等は反則にはならない。ただし、相手が完全に技も入っていない段階で、待ち構えた状態で脚を取って返しに行くことは「反則負け」になる。

- ・「肩車」などは、「脚を持ったかどうか」は重要ではなく、帯より下を攻撃すること自体が「反則負け」に値する。

- ・防御については、脚に触れた程度では「反則負け」としない。

- ・脚取りによる「反則負け」は100%確実な場合のみとし、100%未満の場合は、合議やジュリーと協議して決定する。

② 例外(肩越しの片襟組み)について

- ・片襟を肩越しに組んだ場合、受けは持たれた瞬間に脚を取っても許される。

- ・肩越しに組んだ選手は、即(1、2秒で)攻撃をしなければならない。攻撃動作がない場合は「待て」として、肩越しに組んだ選手へ「指導」が与えられる。

③ 「効果」の廃止

- ・「効果」を廃止し、優勢勝ちの判定基準は「有効」以上とし、「有効」以上の得点差が無い場合には、ゴールデンスコアで勝敗を決する。現状の「効果」に相当する技の評価はしない。また、「抑え込み」の場合においても15秒未満は得点としない。

6

④ 罰則の規準(「指導1」の場合は、得点としない)

- ・「効果」の廃止に伴い、1回目の「指導」は得点とはせず、2回目「指導」で相手に「有効」相当の得点が与えられる。但し、1回目の「指導」においても従来と同様に発声し、掲示板に表示する。

⑤ 場内外の判断基準

- ・立ち姿勢において、どちらかの試合者の一部でも場内にある場合は試合を継続するが、双方の試



合者の全身が場外に出た場合は「待て」とする。

⑥ 次の禁止事項を犯した場合は、より厳格に対処する。

- ・腰を曲げ、頭を下げた低い姿勢を取り続けること。
- ・偽装的な攻撃をすること（掛け逃げ）
- ・組み手を嫌うこと（早めに双方に「指導」を与える）。また、自分の襟を押さえたり、ただ相手の後襟を上から押さえ続けたりして相手に組ませないようにすること。

⑦ 敗者復活戦はベスト 8 に進出した選手のみが対象となる。

⑧ 審判員システム

- ・試合は 1 名の主審と副審 2 名（対角線上）で審判を行う。
- ・2 台のビデオカメラで 2 方向から撮影する CARE システムを採用し、審判団をサポートする。
- ・CARE システムの操作と監督は IJF 審判委員会で行う。

⑨ ゴールデンスコア

- ・ゴールデンスコアにおいてスコアボードに表示された最初の試合の結果は、試合時間以外そのまま残す。
- ・ゴールデンスコア終了時に両者優劣がない場合、審判員は最初の試合とゴールデンスコアの双方の内容から判断し判定を行う。
- ・ゴールデンスコアの試合時間は 3 分間とする。

## 2. 規定改訂の経緯

### (1) 伝統的な柔道の復活

柔道の国際化に伴い、欧州やアジアの選手のなかにはサンボ、モンゴル相撲など他の格闘技から転向してきている。柔道スタイルの変化の原因のひとつはここにあるのだろう。他の格闘技を応用した選手は、柔道本来の崩しの効いた技ではなく、相手を仰向けにさえすれば良いといった強引な仕掛けなるケースが見受けられる。

2007 年、ブラジルのリオデジャネイロ世界選手権を観戦した日本男子研修団・監督の吉鷹氏は「柔道スタイルが限りなくレスリングに近くなっている。欧州選手の殆どが下半身ねらいの技であり、その種類は肩車、朽木倒、双手刈、掬投、内股透かし（ヨーロッパ型）、巴投の 6 つに絞られる。この傾向はアテネ五輪以降特にここ 2、3 年で顕著になっており、今年 6 月にベルリンで行われたドイツジュニア国際大会では、日本選手以外の決まり技を調べたところ男子試合の 9 割が上記のいずれかの技であった。」<sup>10)</sup> と最近の柔道が直接、脚を取って攻撃する技が主流になっていることを指摘している。

その状態でお互いに足を取られない為には、極端なディフェンススタイル（レスリングスタイル）が必要となる。以前のように真っ直ぐ立って柔道をしようものなら足取りを得意とするヨーロッパ選手の格好の餌食なのである。

また、北京オリンピックのデータ分析では、全日本柔道連盟強化委員会科学研究部の中村氏が「男子では『肩車』が決まり技の 1 位となったが 100kg チャンピオンのモンゴル選手に代表されるような中央アジアや旧ソ連勢のスタイルが席卷していることを象徴する結果と言える。また、『隅返』や『巴投』といった捨て身技や『双手刈』『朽木倒』『すくい投』の脚を取る技も上位にある。国際柔道関係者の間では、前傾姿勢の組み手争いと、相手の下にもぐる技の組み合わせで低い位置でしか闘わないスタイルを『1m 柔道』と表現することがあるが、まさにその状況を示している。」<sup>11)</sup> と柔道の戦い方の変化を述べている。

7

こうした戦い方に関して、IJFも危機感を抱いていたのであろう。前述した①、②、③、④、⑥という規定の改定によって、正しく組み合った柔道を推進した。具体的に、手や腕によって帯より下へ直接攻撃または防御は全て禁止することで、組み合って技の攻防をしなければならない。それと同時に、レスリングスタイルのような姿勢に対する罰則を強化することで、組み合わない柔道を否定した。さらに、柔道の得点のなかで最も小さな「効果」というポイントが廃止した。IJFは勝敗を小さなポイントで決するのではなく、一本を取る柔道を推進するという姿勢を示したのである。

このように、規定によってレスリングスタイルに変化していた展開に歯止めをかけたのである。これらの改訂は、お互いが組み合って一本を追求する『伝統的な柔道』の復活を期していたIJFの改革といえる。

## (2) 試合時間、大会運営の短縮

柔道を見る側にとって、競技自体の観やすさ、分かりやすさが非常に重要となる。そうした意図による改訂は⑤、⑦、⑧、⑨である。これらの改訂は試合時間を短縮し、大会運営をスリム化することが可能となった。

始めに、場内外の判断基準において、改訂前は試合中にどちらか一方の選手が立ち技での攻防中に場外に出た場合は「待て」が掛かって試合を中断させていた。今回の新規定では、どちらか一方の選手の体の一部でも場内に残っていれば寝技による攻防と同様に「待て」を掛けずに試合を継続する。

これによって、試合の中断が減少し、展開が継続できる。その結果、試合時間の短縮にも繋がるであろう。ゴールデンスコアや敗者復活戦に関する改訂も、同様の意図が見受けられる。敗者復活戦については、IJF会長ビゼールの「朝から夜遅くまで試合が続くのは中だるみもあってよくない」<sup>12)</sup>という意向があり、敗者復活戦はベスト8に進出したものに限られることとなった。

ゴールデンスコアでは、『スコアボードに表示された最初の試合の結果は、試合時間以外そのまま残す』という改訂になった。正規の試合時間で「指導1」のポイントを得ている選手は、そのアドバンテージのまま進行できる。これには、ポイントがリセットすることで、ゴールデンスコアでも決着がつかずに判定という展開を避けるという狙いがある。正規の試合時間5分とゴールデンスコア3分ということになれば、時間が長く、展開が膠着してくる。そうした展開から判定による決着は、観客に分かりにくい傾向がある。

判定の分かりにくさを解消する為には、審判員システムも導入している。ビデオによる判定は誤審を防止し、選手やコーチだけでなく、観客も納得できる判定を下す、観やすさを求めたのである。

このように、これらの規定を改訂することで柔道の試合や大会自体をより見やすく、分かりやすくものにしようというIJFの意図が見受けられる。

## 3. 規定改訂の影響

### (1) 柔道のスタイル

- 8 規定改訂後、2009年パリ・グランドスラムを総評して日本選手団コーチの賀持氏は「全体的には、新ルールを採用により、試合内容は良くなってきたように感じた。頭を付け合う低い姿勢での組み手争いや、組まない状態が長く続くという現象は以前に比べると減ってきた。姿勢が起きてきて、組み合っただけの攻防が増えるという現象は柔道にとっても日本にとっても非常に喜ばしいことである。」<sup>12)</sup>と日本選手が有利になったという見解を述べている。

それは同時に、IJFの指針である『伝統的な柔道』の復活に繋がるとも考えられる。多くの代表選手を抱える了徳寺学園柔道部監督・山田利彦氏は、2010年の世界選手権を観戦して、柔道スタイル



の変化について次のように述べている。

「脚への直接攻撃が禁止となり、柔道スタイルにも大きな変化が現れたように思います。これまでは真っ直ぐ立って組み合うとすぐに肩車や朽木倒の標的となっていました、今回活躍した選手はそうした技に脅かされることなく、思う存分、技での攻防に徹することができたように思います。脚への攻撃に対して一発反則負けになることや柔道の技として当初より名を連ねた肩車や朽木倒などの技が制限されることに對して100%納得は出来ませんが、明らかに今回の柔道を見て、その醍醐味を味わえる状況になってきたように感じました。」<sup>13)</sup>

選手やコーチ以外の意見でも、同大会において大会審判員を務めた天野氏は「北京オリンピック以降大きなルール改正が行われ、その改正が定着してきたためか、『組んで一本を取る柔道』『攻め抜く柔道』が日本選手だけでなく各国の選手にも多く見られ、ダイナミック柔道を満喫できた人は多かったに違いない」<sup>14)</sup>とIJFの規定改訂を賞賛している。

このように、IJFが行った改革は『伝統的な柔道』を取り戻すという観点において、見事な戦略であったといえる。さらに、柔道の醍醐味を味わうことができる試合が増えたという見方もあり、柔道のイメージ向上にもつながる。

柔道の醍醐味は言うまでもなく、「一本」を取る技である。理にかなった技での「美しい一本」はまさに一種の芸術のようなものであり、人々の目を釘付けにする。観衆を魅了する柔道の実践こそが、IJFの指標とする『ダイナミックな柔道』なのである。

こうした柔道スタイルの変化に伴い、2010年の東京世界選手権では強豪国のグルジアが2005年以降、初めてメダルを逃している。低姿勢での攻防を得意とする「グルジアスタイル」が今回の規定改訂によって制限されたことの影響したのであろう。

地域別メダル獲得数をみると、男子においては旧ソ連勢が著しく低迷し、ヨーロッパ勢、アジア勢、アメリカ勢の躍進が見られた。女子においてはヨーロッパ勢が低迷し、アジア勢、アメリカ勢の躍進が見られた。男女に共通することはアジア勢、アメリカ勢の躍進である。日本や韓国など、組み合って攻める柔道スタイルの選手が多い国にとっては規定改訂が追い風になったようである。

## (2) 技の判定基準

規定改訂前、柔道における技の判定基準は「一本」、「技あり」、「有効」、「効果」の順で判定され、「効果」はIJF規定のみで使われる技の判定規準であった。IJF試合審判規定でのそれぞれの技の定義は以下の通りである。<sup>15)</sup>

### 「一本」の定義

- ・投技においては、試合者の一方が、相手を制しながら背を大きく畳につくように、相当な強さをもって投げたとき。（「相手を制しながら」、「背を畳につく」、「強さ」、「速さ」の4条件を十分満たしていることが「一本」の条件）
- ・寝技においては、試合者の一方が相手を25秒押さえ込んだとき。

### 「技あり」の定義

- ・投技においては、試合者の一方が、相手を制しながら投げ、その技が「一本」に必要な他の3つの要素（「背を畳につく」「強さ」「速さ」）のうち1つが部分的に不足している場合。
- ・寝技においては、試合者の一方が、相手を20秒押さえ込んだとき。
- ・「技あり」二つで合わせて「一本」となる。

### 「有効」の定義

- ・投技においては、試合者の一方が、相手を制しながら投げ、その技が「一本」に必要な他の3つの要素（「背を畳につく」「強さ」「速さ」）のうち2つが部分的に不足している場合。

- ・寝技においては、試合者の一方が、相手を15秒押さえ込んだとき。
- ・いくつ「有効」があっても、1つの「技あり」に及ばない。

#### 「効果」の定義

- ・立ち技においては、試合者の一方が、相手を制しながら「強さ」と「速さ」をもって、片方の肩、尻、大腿部がつくように投げたとき。
- ・寝技においては、試合者の一方が相手を15秒押さえ込んだとき。
- ・「効果」はいくつあっても1つの「有効」に及ばない。

上記したように、「有効」と「効果」においては、いくら投げても上のポイントにはならない。何回投げても一回の「一本」、または「技あり」には届くものではないということである。つまり、ポイントとして不十分なものとして「効果」が廃止されたのである。「ダイナミックな柔道」を推進しているIJFの戦略からすれば、今後、「有効」が廃止されるということも十分に考えられる。

「効果」の廃止後に行われた2009年世界ジュニア選手権を観戦し、日本女子選手団コーチ・阿武教子氏は次のように述べている。「攻めているが一瞬尻餅について『効果』で負ける心配がないためか、選手は思い切って攻めていけたように感じた」<sup>9)</sup>「効果」の存在が選手を消極的していたことを示唆している。投げ技において、「効果」は実に些細なことで動くことが多く、少し尻餅をついた程度でもポイントになる。そうしたことから、選手のなかにはミスを恐れ、消極的になってしまう事例があるのだろう。

このように、効果がなくなったことは、小さなポイントを奪い、逃げ切るという試合展開もなくなる。選手は「有効」以上のポイントを狙い、以前よりダイナミックな柔道をしなければいけない。試合を観る側にとっても、小さいポイントで試合が決まるのが減り、見応えのあるものとなる。IJFの戦略はここでも大いに成果をあげたことが分かる。

#### 4. 規定改訂に関する考察

「伝統的な柔道の復活」という構想の基、IJFにおける規定改訂の与えた影響は大きい。それによって、柔道のスタイルは変化した状況から見ると、IJFの戦略が成功したことが窺える。

一方、成果とは別の観点で賛否が分かれる項目もある。それは、ダイレクトに手や腕で脚を攻撃することが禁止され、一部の技が制限されるということである。具体的には、「小内巻込」「肩車」「双手刈」「朽木倒」などがその対象となった。それらの技を得意としてきた海外選手やもちろん、我が国でも反対する見解もある。それは『講道館柔道の技として存在してきた技を簡単に禁止して良いのか』という観点からである。

2010年東京世界選手権を観戦した全日本柔道連盟・総務委員会特別委員の正木照夫氏は以下のように技の制限が柔道の迫力を失ったことを指摘している。「私は、技を規制するルール変更には賛成できない。柔道には朽ち木倒し双手刈りのように、相手の足を取る技は昔からある。それを禁止することは、柔道の幅を狭めることにならないか。一瞬の隙をついて足を取る、背後を取る、そういった緊迫感がなく、迫力を欠いた試合も多かった。相手のどこを持っても「一本」を取るというのが柔道。」<sup>16)</sup>

こうした見解に関して、全日本柔道連盟会長・講道館長の上村春樹氏は「本来は、『技』をすぐに禁止するのではなく指導の一環で正しく組むようにすることが大事ですが、ここまで組まなくなった柔道を元に戻すのは指導だけでは困難であり、止むを得ないと思っています。これらの技を禁止することは柔道の攻撃の幅を狭くすることにもなりかねませんが、今回行われるのはダイレクトにかける技のみも禁止であり、相手の投技に対応しての返し技、他の技からの連絡変化としての使用

は認められているので、当面は柔道の正しい組み方をさせることを優先せざるを得ないと思っています。反面、今後このことが新たな問題を引き起こすことも懸念されるところです<sup>17)</sup>とIJFの方針を擁護している。

「ダイレクトに脚を攻撃することを禁止する」という規定ではさらなる問題も生じる。それはこの反則を犯してしまった際の罰則が「反則負け」と非常に重いことである。その為、反則の基準をどう見極めるか、審判員の技量に全てが委ねられる。

2010年世界選手権を観戦した全日本柔道連盟・理事の高木氏は次のように述べている。「いきなり脚取りが反則負けになるルールに関しても、今大会では『あれ、今の大丈夫なの?』というようなケースが多々見受けられた。紙一重というより、判定をする“審判次第”という感じで非常に曖昧な印象を受けてしまった。」<sup>18)</sup>

規定や判定の甘さは、時として見ているファンを興奮めさせてしまうということをもっと意識しなくてはいけない。昨今、規定改訂はIJFの『柔道を改革する』という目的で、毎年のように行われている。そのルール変更には選手はおろか、審判員も十分に対応できていない面もあると感じられる。

## 終わりに

東京オリンピックの翌年にあたる1965（昭和40）年、IJF会長が日本人から英国人のC・パーマー氏に代わった。これを機にIJFによる会議では、世界中に柔道を普及することを指標に、次々と新しい議題が提出されていった。そのひとつとして、柔道創設から我が国が定めた講道館試合審判規定とは別に国際試合審判規定が誕生したのである。

IJFが新しい提案をすることに対して、我が国は『柔道の本質ではない』と反対したが、ほとんどが採用されていった。我が国の主張は世界の流れから後手にまわり、新しい議題を覆すだけの根拠がなかったといえる。こうして、柔道はIJFを中心としてスポーツとしての考えを固めていったのである。

競技化され、スポーツとしての柔道は間違いなく、発展を遂げた。その反面、柔道の精神が置き去りとなって、戦い方のスタイルまで変化してしまったという見方もできる。低い姿勢で脚を取り合う姿から、ジャケツレスリングなどと揶揄されたほどである。どれ程、柔道が発展したとしても、武道の特性やこだわりを無くしては全く意味がない。

こうした現状から、IJFの戦略によって、審判規定やシステムなど大幅な改革が行われてきた。その結果、IJFの戦略通り、柔道のスタイルが「伝統的な柔道」に戻る兆しを見せている。前述してきた審判規定の改訂以外にも、IJFは礼法の徹底、コーチ・選手のマナーの改善、表彰台での白柔道衣着用義務化など、武道の精神を尊重する取り組みを行っている。

今後、柔道がより良い発展を遂げるためには、変えていかなければならない部分を熟慮した上で、柔道の本質を守っていかなければならない。改革に問題点が存在しても、その目的によってはやむを得ず、実行するというケースもあるだろう。我が国としてはIJFと同様の目線を持つと同時に、広い視野と柔軟な思考で判断し、「柔道の原点」を示していく立場にある。IJFの改革に意見していくだけでなく、自らも改革に参加する意識が必要である。

## 引用参考文献

- 1) 小野沢弘史「IJF総会報告」、柔道11月号、138-143、講道館（2011）
- 2) 上村春樹「IJF総会報告」、柔道11月号、57-59、講道館（2007）
- 3) 上村春樹「IJF総会報告」、柔道11月号、60-61、講道館（2007）

- 4) 全柔連だより、全日本柔道連盟機関紙、第35号、3月号 (2009)
- 5) 全日本柔道連盟HP、「<http://www.judo.or.jp/topics/>」
- 6) 篠原信一「大会を終えて」柔道11月号、37-39、講道館 (2009)
- 7) 高木長之助「大会観戦記」、柔道11月号、85-88、講道館 (2010)
- 8) 雑賀晃司「IJF会長マリウス・ビゼールの戦略に関する一考察」、埼玉大学保健体育講座卒業論文 (2010)
- 9) 全日本柔道連盟「国際試合審判規定」、全日本柔道連盟 (2010)
- 10) 吉鷹幸春「大会観戦記」、柔道1月号、51-53、講道館 (2007)
- 11) 中村勇「柔道をカガクする。」、近代柔道10月号、63、ベースボールマガジン社 (2008)
- 12) 賀持道明「総評」、柔道4月号、75、講道館 (2009)
- 13) 山田利彦「大会観戦記」、柔道11月号、79-82、講道館 (2010)
- 14) 天野安喜子「大会観戦記」、柔道11月号、83-84、講道館 (2010)
- 15) 全日本柔道連盟「国際試合審判規定」、全日本柔道連盟 (2008)
- 16) 正木照夫「鉄人柔道家の東京大会観戦記」、近代柔道11月号、40-41、ベースボールマガジン社 (2010)
- 17) 上村春樹「巻頭言」、柔道1月号、1-4 講道館 (2010)
- 18) 中村勇「データで読む東京世界選手権」、近代柔道11月号、36-39、ベースボールマガジン社 (2010)
- 19) 大辻広文「IJF臨時総会報告」、柔道1月号、94-98、講道館 (2009)
- 20) 山口香「マリウス・ヴィゼールIJF会長に聞く」、柔道12月号、26-29、講道館 (2008)
- 21) 吉村和郎「大会総評」、柔道11月号、34-36、講道館 (2009)
- 22) 小野沢弘史「IJF総会報告 (2)」、柔道1月号、95-101、講道館 (2010)
- 23) 高橋進「ルール改正に伴う柔道の技術内容の変化についてー世界選手権を対象としてー」、柔道科学研究第4号、7-13、全日本柔道連盟科学研究部 (1996)
- 24) 野瀬英豪「JUDOが日本に与えた影響ー国際規定と国内規定の併用による問題点を中心にー」、埼玉武道学研究第7号、1-7、埼玉武道学会 (2009)
- 25) 野瀬清喜「柔道学のみかたー若き指導者たちのために」、文化工房 (2008)

(受理 平成24年1月10日)